2017.2.5　年間第五主日

地の塩・世の光

マタイによる福音 5:13-16

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

説教

今の季節は早朝の犬のさんぽにでかけるときはコートを着て、手袋をしてでかけます。まだ薄暗い空をみあげると月がみえます。月は太陽の輝きを受けて光っています。きれいだなと思います。また満ち欠けして形を変えるので毎日見ていてもあきません。わたしは西の空に姿を隠そうとしている満月よりも、新月まぢかの眉のように見える月が空の低いところに浮かんでいる姿のほうが好みです。宇宙飛行士ガガーリンは地球は青かった、といいました。月から地球を見たらどのように見えるのだろうと、ふと思いました。青く光って見えるのだろうか、こっちから月を見るように満ち欠けしてみえるのかな、と想像はふくらみますが月までは遠くて行けそうにないのが残念です。イエスは、「あなた方は地の塩である。……あなた方は世の光である。」と言われます。イエスは、「あなた方は地の塩になりなさい。あなた方は世の光になりなさい」と言ってはいません。それは私たちは、おん父からすでに「地の塩」「世の光」という恵みをすでに頂いているからです。

ときどき、塩っ気の強すぎる人がいます。またやたらに明るい人もいます。

また逆に塩っ気のぬけた人、輝きとは無縁な感じの人もいることでしょう。目的をもって行動しましょう、目的のない人生はつまらない、などという人もいます。
「地の塩、世の光」を目的とする生き方はいかがなものか？それはおん父の望むことだろうか？と疑問が浮かびました。

> **また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。**マタイ５：15-16

今日の福音のむすびはこのようになっています。わたしの経験では「あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」はそうだ、そうだと同感ですが、その前段の「人々の前に輝かしなさい云々」には同意できません。聞き流せばいい箇所だとおもいます。「地の塩、世の光」の福音個所はマタイ福音書だけではなく、マルコ・ルカにも並行個所があります。マルコ・ルカのむすびはほぼ同じ内容でこうなっています。

> **また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない。**マルコ４：21－22

あなたがたは光を人前で輝かしなさいとマタイが言うのとは意味合いが違っています。マルコ・ルカでは光は隠れているもの、隠しているものを照らし出すよと言っています。
月が太陽の光をうけて輝くことを私たちは知識として知っています。また実際に見て理解しています。また、月は満ち欠けします。満月でピカピカ光るときもあれば、新月で真っ暗なときもあります。わたしたちもおん父の光を受けて輝いています。そして「あなたがたは世の光」とイエスもおっしゃい

ます。でも月と同じように自分から輝いているわけではなく、ただ光を受けて光っているのであればピカピカのときもあれば、真っ暗のときもあるでしょう。自分は輝いていないと悲観することはまったくありません。
先週から読み進めているマタイの山上の教訓（5章から7章）は難解だとおもいます。イエスのみことばを無視するわけにはいきませんが、そのことばの真意はどこにあるのかを探りながら読んでいかないと原理主義的な受け止め方になりがちです。「地の塩であれ、世の光であれ」という旗印で猪突猛進したらおかしなことになってしまいます。わたしたちは過去の間違いを繰り返すわけにはいきません。